

松本市前田木下遺跡

— 遺構確認調査報告書 —

1988・3

松本市教育委員会

序

寿地区的南端、赤木山周辺には古くより多くの遺跡の存在が知られ、その時代も旧石器時代から現代までほとんど途切れることなく続いております。当地での発掘調査は昭和58年以降既に8遺跡を数え、從来あまり知られていなかった時代の遺構・遺物の発見が相次ぎました。

前田・木下遺跡は昭和58年に調査を実施し、縄文時代中期を中心とした大集落跡であることが判明しております。今回の調査は県営は場整備事業に先立ち、前回調査地東側の遺構確認を目的として行いました。その結果広い範囲にわたり遺構の存在が認められ、短期間の調査にもかかわらず多くの成果をおさめることができました。

調査に際しましては地元寿小赤地区のみなさま、関係機関の方々より多大なるご協力をいただきここに謝意を表して序といたします。

昭和63年3月

松本市教育委員会

教育長 中島俊彦

例　　言

1. 本書は昭和62年10月29日から11月5日にかけて行った、松本市大字寿に所在する前田木下遺跡の遺構確認調査報告書である。
2. 本書は県営は場整備事業に伴う事前の遺構確認調査であり、長野県松本地方事務所より委託を受け、松本市教育委員会が調査を行ったものである。
3. 遺物の実測図は紙面の都合により、全てを示し得なかった。
4. 自然環境、周辺遺跡については、「前田木下遺跡」、「赤木山遺跡群Ⅰ・Ⅱ」を参照されたい。
5. 本書の編集は事務局が行い、執筆はII-4-2を開沢聰が、他は竹原学が行った。
6. 本書作成にあたっての諸作業は下記の者が行った。
赤羽包子、五十嵐周子、岩野公子、西川卓志、土橋久子、開沢聰、滝沢智恵子、百瀬利子、
竹原学
7. 遺物の写真撮影は宮嶋洋一氏にお願いした。
8. 委託契約書、作業日誌等の事業経緯を示す書類は調査結果の記述を重視したため文章として掲載できなかつたが、出土遺物及び図類と共に松本市教育委員会が保管している。

目 次

I 調査の経緯と経過	
1. 事業の経緯	1
2. 調査体制	1
II 調査結果	
1. 調査の方法	5
2. 遺跡の土層	5
3. 検出遺構	6
(1) 遺構の概要と遺物の分布	6
(2) 3グリッド	7
(3) 4グリッド	7
(4) 5グリッド	7
(5) 6グリッド	8
(6) 9グリッド	8
(7) 10グリッド	9
4. 出土遺物	
(1) 土器	10
(2) 土製品	14
(3) 銅製品	14
(4) 石器	27
III 調査のまとめ	31

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と調査地点	2	第10図 土器拓影 (1)	20
第2図 調査範囲	3	↓	↓
第3図 検出遺構	4	第16図 土器拓影 (7)	26
第4図 11グリッド出土遺物	14	第17図 石器実測図 (1)	29
第5図 土器実測図 (1)	15	第18図 石器実測図 (2)	30
↓	↓		
第9図 土器実測図 (5)	19		

I 調査の経緯と経過

1. 事業の経緯

- 昭和61年8月29日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。
- 昭和61年12月23日 昭和62年度補助事業計画書提出。
- 4月28日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡。
- 5月16日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 6月1日 昭和62年度県営は場整備事業小赤地区赤木山遺跡群埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 7月11日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 7月20日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月5日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 8月20日 現地にて埋蔵文化財保護の再協議。
- 8月29日 赤木山遺跡群変更委託契約書の締結。
- 10月25日 赤木山遺跡群埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 11月12日 赤木山遺跡群埋蔵文化財拾得届及び同保管証提出。
- 12月10日 赤木山遺跡群埋蔵物の文化財認定通知。

2. 調査体制

調査団長 中島俊彦（松本市教育委員会教育長）

調査担当者 神沢昌二郎（松本市立考古博物館長）

現場責任者 竹原 学（社会教育課嘱託）

協力者 新井唯邦 大谷成嘉 奥原富藏 開崎八重子 葛原武善 児玉春紀

田中東造 土橋久美子 中島督郎 林伊和夫 丸山久司 丸山 誠

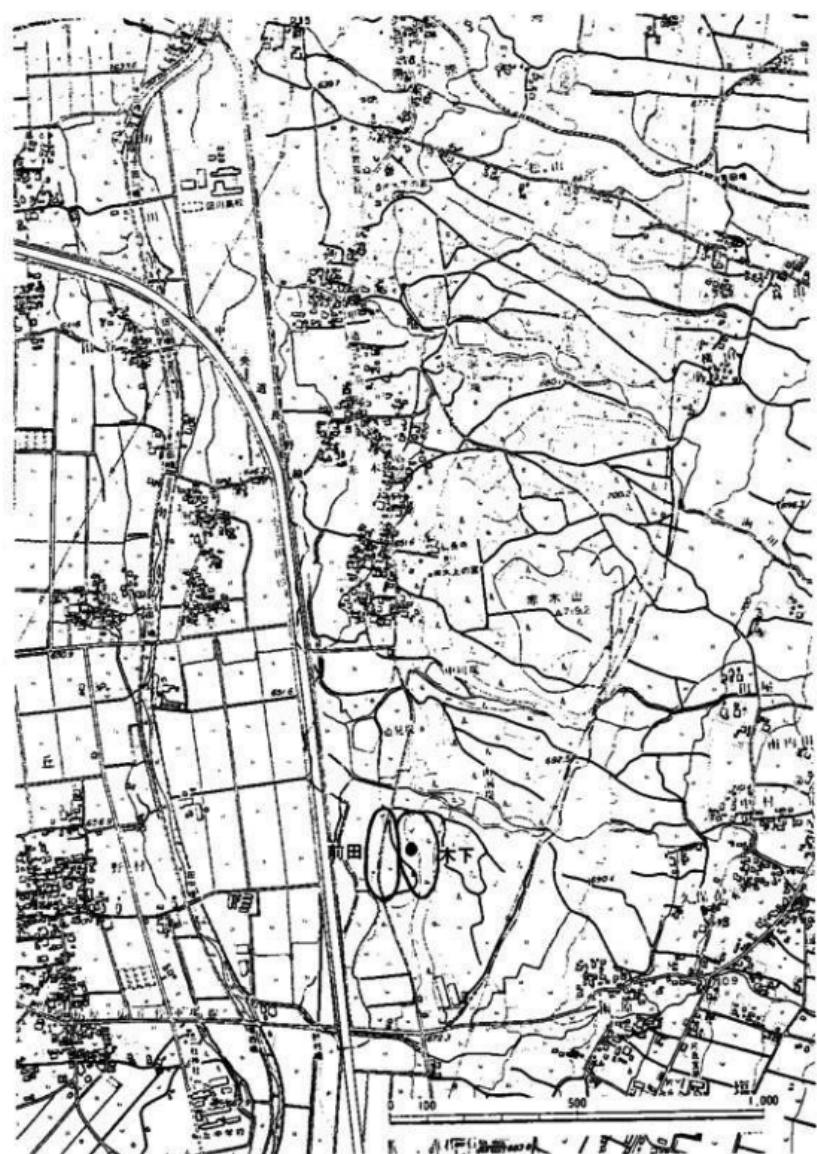
村山正人 横山篤美 横山倍七 横山保子

事務局 浅輪幸市（社会教育課長） 小松 晃（文化係長）

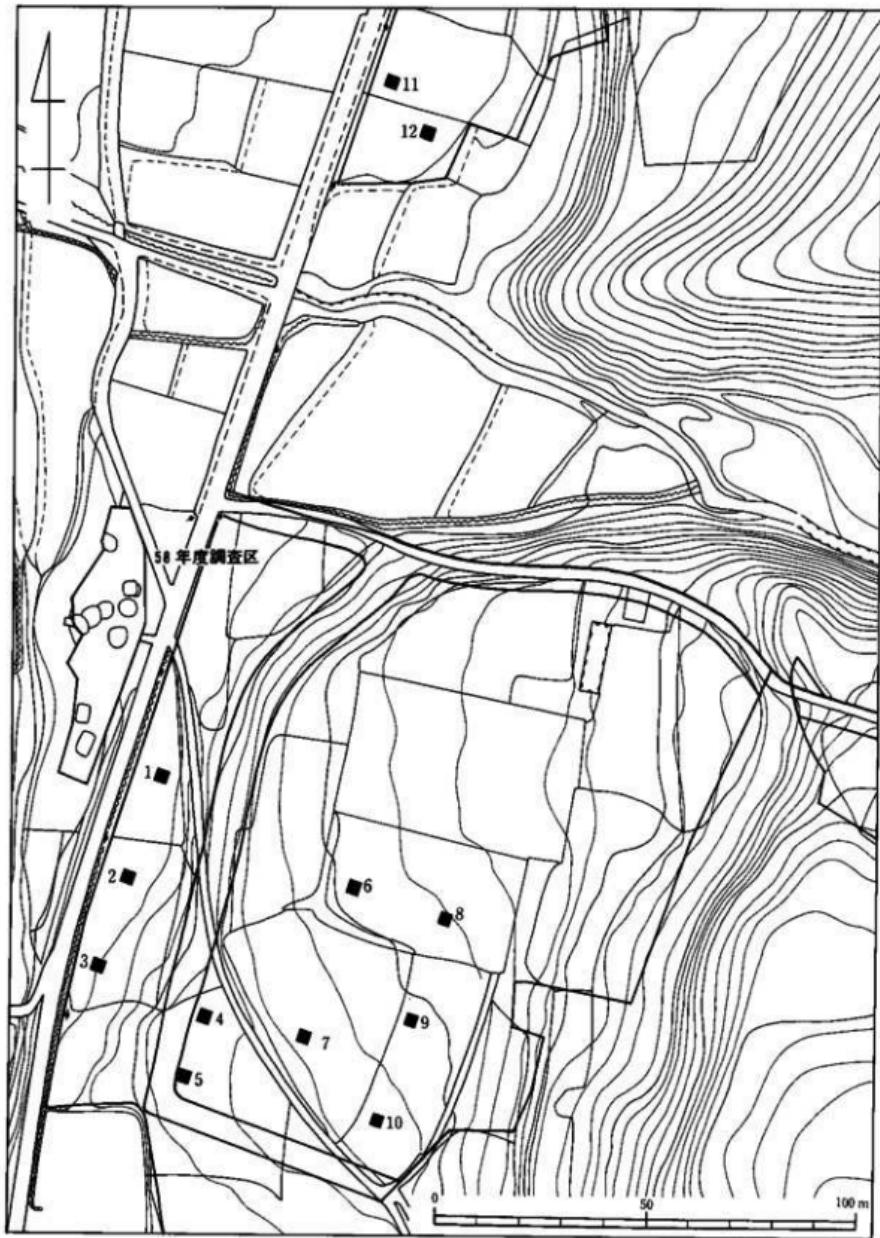
柳沢忠博（主査） 大村敏博（主査）

熊谷康治（主事） 直井雅尚（主事）

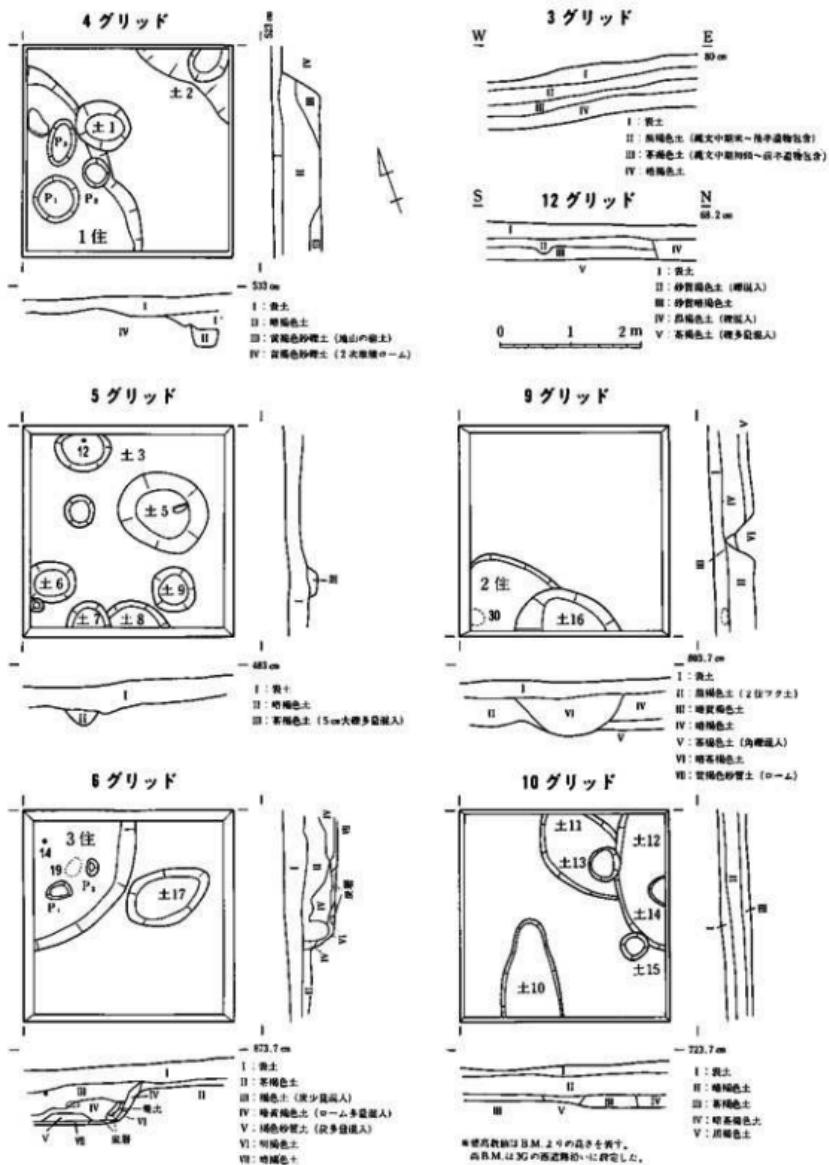
洞田睦子



第1図 遺跡の位置と調査地点



第2図 調査範囲



第3図 掘出遺構

II 調査結果

1. 調査の方法（第2図）

前田木下遺跡は松本市券小赤集落の南方約600mに位置し、県道新茶屋塩尻線をはさみ東西に広がる。地形的には県道とほぼ並行して南北に走る段丘崖の上面、すなわち東側が木下遺跡、下面が前田遺跡とされている。両遺跡の北限は南洞川までと考えられ、特に上面の木下遺跡は比高差10mの断崖となっている。

本遺跡の過去における調査は、昭和58年の前田遺跡緊急発掘調査が挙げられる。調査地点は県道西隣約920mで、今次調査1グリッドとは15m離れる。遺構は縄文中期後半を中心に竪穴住居址14棟が検出されている（『前田木下遺跡』参照）。また台地上面の木下遺跡は古屋人兄氏所蔵の遺物があり、縄文中期前葉を主体とした遺跡であることが知られている（『寿小赤遺跡』参照）。

今回の調査は県道の東一帯、木下遺跡の遺構確認を目的とし、その広がり、層位、時期を把握することに主眼が置かれた。従って面的調査は行わず、調査範囲内各所に3m四方のグリッドを設定、各地点での土層の観察、遺構・遺物の検出を行うこととした。そして遺構が検出された場合は、時期・性格をつかむためにグリッドの範囲内で掘り下げを行った。

第2図はグリッドの配置図である。グリッドは全て工事用測量杭より測距し、地図上に正確に落とせるよう努めた。耕作等により台地の北半部は調査不可能で、南半を中心にして10個所設定、調査を行った。グリッドは西北のものから1～10の番号を冠した。1～3グリッドは段丘下の崖錐性斜面上にあり、立地的には前田遺跡の延長上にある。4・5は台地縁辺部に設定、他は緩斜面上にある。

一方、今回のは場整備は南洞川北岸にも予定地があり、この区域にも2個所グリッドを設定、遺構の有無を確認した（10・11グリッド）。

2. 遺跡の土層（第3図）

各グリッドの土層観察の結果、遺跡地の堆積の有り方は東西方向で大きく変化し、台地中央～東側（8～10グリッド）、台地先端部（4～7グリッド）、台地下面（1～3グリッド）の概ね3類型に分けられた。

台地中央～東 8～10グリッドは基本的に3層の堆積がみられる。第I層は耕作土で、II層の影響のため黒味が強い。層厚は15～20cmを測る。第II層は20～35cmの厚さを有し、漆黒色を呈する。縄文中期の遺物を包含し、本層中より遺構が掘りこまれる。第III層の黄褐色土は二次堆積のロームで、粘性は強いが場所により角礫を多く含む。8グリッドではII～III層間に拳大～人頭大の角礫の集石が見られたが、状況より自然堆積と判断された。

台地先端部 中央部で見られた漆黒色土層は存在しない。地表からロームまでは浅く、15～30cm

を測る。第III層（ローム）は部分的に砂れきを含まず粘性があり、上面に漸移層を形成（第II層）、この面より遺構が掘りこまれる。

台地下面 1～3グリッドは崖錐性の地形上にある。そのため堆積は厚く、未検出ではあるがローム面までの深さは80cmを超えると思われる。3グリッドでは4枚の層が確認され、第II層（黒色土）には縄文中期後半～末、第III層（茶褐色土）は中期初頭～前半の遺物がそれぞれ包含されていた。第IV層は無遺物層である。

これらの堆積状況は、遺跡が西方に傾斜する地形面にあることに起因すると思われる。台地中央～東側は上方からの堆積作用を受け、先端部は逆に風雨により浸食され段丘下に堆積していった結果であろう。縄文時代の遺構はその過程で営まれるため、検出面は台地東半部ではローム面より高く、逆に先端部ではよりローム面に近い。

次に南洞川北岸の11・12グリッドであるが、両者とも他とは土質が異なっている。基本的には表土下より小礫混じりの砂質土が、土色を変えて平行に堆積している。河川の影響による堆積状況といえよう。立地的に南洞川に近く、比高差がほとんどないこともこれを裏付けよう。

3. 検出遺構（第3図）

(1) 遺構の概要と遺物の分布

今回の調査では12グリッド中5個所で遺構が検出された。内訳は竪穴住居址3・土塙17で、いずれも縄文中期に属する。その分布をみると4グリッド：1号住・土塙1・2、5グリッド：土塙3～9、6グリッド：3号住、土塙17、9グリッド：2号住・土塙16、10グリッド：土塙11～15となっており、いずれも台地上面で検出されている。少ない調査グリッドから推定するのは危険であるが、台地全面に高密度で遺構が広がっているようである。

次に遺物の分布であるが、調査面積が少ないのでかわらずその出土量が多い。内容は縄文土器が約500点（破片が多い）、石器23点、金属製品（キセル）となっている。縄文土器はほぼ全てが縄文中期で、特に初頭と末葉にピークがある。次いで多いのが前葉で、中葉～後葉は少ない。台地下面の58年調査地点ではこの欠落を補うかのように中期後葉の遺構・遺物が主体となっており、注意されよう。

各グリッド毎の遺物の出土量をみると、台地下面では1・2グリッドが皆無に等しいのに対し、3グリッドでは約120点出土があった。時期は初頭～前葉、後葉～末葉がほぼ等量を占める。台地上面では遺構の存在を反映して出土量は多いが、遺構のない7・8グリッドはわずかである。時期毎の分布は中期初頭が8～10グリッドに集中、前葉は5・6グリッドを中心に出土した。また末葉は全域に見られるが、とくに4・5グリッドに多い。これらの有り方は遺構の時期的・位置的分布ともよく合致する。

11・12グリッドは土層の項で述べたように河川性堆積の見られる低地にあり、遺構・遺物の検出は

なかった。ただ一点、銅製のキセルが出土したのみである。(第4図)。

(2) 3グリッド

本グリッドは段丘下の斜面にあり、崖錐性堆積のためローム面は深く、-80cmでも達しなかった。しかし遺物は-50cmをこえると全く見られなくなり、上限時期と考えられるため、調査を打ち切った。從ってローム層の存否は不明であるが、58年調査区の南半すなわち3グリッド西北45mの地点には二次堆積ながら良質のロームが存しており、本グリッド周辺までは続くものと思われる。

遺物は中期初頭～前葉、中期末葉の土器片が層位的に得られた。それぞれの包含層は層厚10～20cmを測る。中期末葉の土器類は小破片が多く、また中期初頭の土器類は接合可能な大形の破片が目立った。また両者共に著しい風化・摩耗は受けておらず、上方からの流れ込みとは考えにくい。このような状況から土器の廃棄場としての性格が考えられよう。特に半完成品も見られる中期初頭～前葉についてはその可能性が高い。遺物の時期より見ても、台地上面の遺構群と密接に関係するものといえよう。

(3) 4グリッド

本グリッドは後述する5グリッドとともに台地先端にあり、表土を取り除くと-10～20cmでローム面があらわれた。耕作土内には中期末葉を中心とした土器片、石器が多く含まれている。ロームは二次堆積のため砂礫質で、軟弱であった。この面での精査を行うと西半部にゆるく弧を描く黒色の落ち込みがあり、遺構の可能性を考慮して掘り下げを行った結果、住居址であることが判明、第1号住居址とした。また西北隅にも褐色の落ち込みがあったが浅い窪みと判り、底面の落ち込みを土塹2とした。その他に1住と切り合う土塹1がある。

第1号住居址 全体の5分の1程が調査できた。1辺4m前後の隅丸方形になると思われ、調査区には東壁が露呈したことになる。覆土は壁下に黄褐色の壁際堆土がみられる他は黒褐色の单層である。壁は斜めに掘り込まれ、55cmの高さを有する。床面は地山が砂礫質のため軟弱でしまりがない。床面施設は炉址・柱穴等範囲外にあると思われ、円形の浅いピットを3基検出したにとどまった。これらのピットは10cm程の深さで、底面は平坦である。形状からして住居に先行する土塹の可能性もあるが、積極的な根拠は得られなかった。

遺物は大変少なく、土器は7・8が図示したのみである。石器は8・12の2点が出土した。

本址の時期は遺物が少ないためその決定は困難だが、周囲の遺物も考慮し推定すると松本平中期XⅠ期(『内田雨堀遺跡II』島田哲男論文参照、以下〇期と略す)ないしはXⅡ期となろう。

土塹1・2 土塹1は1住を切る。80×70cmの横円形を呈し、深さ47cmの逆台形に掘りこまれる。遺物の出土はない。土塹2も横円形で、50×40cm・深さ35cmを測る。覆土内からは5の土器が出土している。

(4) 5グリッド

4グリッドの南、やはり台地先端に位置している。土層も4グリッドと傾向を同じくし、二次堆

横ロームに遺構が掘りこまれている。

土塙3 グリッド西北隅にあり、北壁がわずかに調査区外に出る。平面形は直径80cmの円形で、深さ12cmを測る。遺物は土器(12・80)があり、12は北寄りに底面より8cm浮いて正位で出土した。これらの土器はXIII期の様相を呈し、本址の時期を示している。

土塙4 土塙3の南にある小形の円形ピットで、直径50cm・深さ26cmの規模を有する。塙内底面には14の土器が存していた。土器よりIV期の遺構と推定される。

土塙5 本址は大形の円形土塙で、130×110cmを計測する。暗褐色の覆土で満たされ底面はすり鉢形を呈し、深さは25cmを残す。東寄りに被熱した川原石があり、付近に土器片(10)が遺存していた。本址はXIII期の遺構と考えられる。

土塙6～8 いずれも南寄りに存する円形土塙である。7・8は切り合い関係にあり、8が先行する。規模は直径60cm前後で8はやや大きいが全容は不明である。深さも20cm内外で逆台形の断面を示す。いずれも遺物の出土がなく時期の決定はできない。

(5)6 グリッド

本グリッドも4・5同様、表土を除去するとローム面となり、北西隅に褐色土の落ち込みを確認、住居址と認定して調査を進めた。

第3号住居址 全体の5分の1程を調査できた。本址は二次堆積ロームに掘りこまれており、深さは50cmを測る。プランは強い円弧を描き、直径3～4m前後の円形になろうかと思われる。覆土は上層に褐色土が堆積するが、下層はロームブロックを多く含む暗黄褐色土で一括埋土の可能性が高い。また東壁下にも焼土・炭を混じえる不自然な堆積があり、さらに床上には5cm程の厚さで炭層が認められた。しかし火災住居とするには炭・焼土が希薄であり、住居の廃絶後に火を用いたなんらかの行為を行い、埋められたものと考えられる。床面は砂れき質のロームに設けられており、中寄りを除いて軟弱である。床面施設は浅い円形ピットが2基認められたがどちらも浅く、炉址・柱穴は調査区外にあるものと考えたい。

遺物は上層に3・14の土器があったほか一括品ではなく、床面にも見られない。量的に少ないがIV期の特徴を備えており、本址の下限時期を示している。

土塙17 本址は3住の東に接して構築され、130×70cmの東西に長い楕円形を呈する。断面形は半円形をなし、40cmの深さを有する。遺物は16・104を図示した。XII期に比定されよう。

(6)9 グリッド

本地区は表土を除去した段階で黒色土が全面に広がり、遺物が多く含まれた状態が観察された。そこで遺構の存在を想定し徐々に掘り下げを行った結果、南西隅を中心に他より暗色の部分が認められた。遺物もこの付近に多く、一括した出土状況も見られた(30)。一応住居址として認定しプランの把握に努めたが、土色の違いが微妙で部分的に現れたロームを手掛かりに推定するにとどまった。遺構は大半がグリッド外にかかる円形の竪穴住居址と考えられ、床面は角礫を多く含む二次堆

積ローム中に設けられる。東部は土塙16に切られている。一部の調査のため床面施設は見られない。

遺物は大変多く、土器は中期初頭の良好な資料となった。(24~30・121~128) 石器も石鎚・石錐等がみられる(1・5~7)。いずれも上層からの出土が多い。

土塙16 本址は2住の掘り下げの過程で確認された。直径約150cmの円ないし楕円形を呈すると思われ、南半は調査区外に延びる。掘り方はグリッド南壁でのセクション観察の結果、黒色土上面よりすり鉢形に掘られ、覆土は暗茶褐色を呈していた。尚遺物が出土していないため、本址の時期は2住に後行する点以外不明である。

(7)10グリッド

調査区域の南端に位置する。土層の堆積状況は8・9グリッドと同様表土下に黒色土が統一され、さらにローム層との間に茶褐色の層があり、この面では遺構が容易に捉えられた。しかし黒色土上面より掘りこまれるものもあると思われ、その把握ができず課題を残した。

遺物は明確に遺構に帰属できるものではなく、ほとんどが黒色土より出土している。時期的には9・10グリッド同様、中期初頭のものが目立つ。

土塙11・12 両址とも規模は大きく、土塙12は住居址の可能性もある。土塙11は長楕円形を呈し、検出面からの深さ5cmを測る。東端は土塙12に切られている。土塙12はその多くが調査区外にあり、規模・プランは不明である。壁のカーブからして住居址の可能性もあるが、床面は軟弱不明瞭で遺物もほとんどないなど決め手に欠ける。

土塙13・14・15 これらの土塙は土塙11・12を切り、近接して存在する。平面形はいずれも直径50cm内外の円形で、平坦な底面を有する。規模・形態・位置ともによく似た遺構である。

土塙10 本址は溝状を呈し、南部は調査区外にのびる。底面は平坦だが、軟らかく不明瞭であった。所属時期は不明である。

4. 出土遺物

(1) 土器

① 繩文中期初頭の土器

第2号住居址を中心に最も出土量が多い。半截竹管状工具等による沈線文を多用する一群と地文として繩文を多用するものに分けられる。さらにその中にもいくつかの形態が存在している。

第1類 沈線文を主体とする土器

A (29・30・122・123・125・127・131・136・142・152・157・161) 30が典型例として挙げられる。屈折して開いた口縁をくの字形に内折させ、体部はゆるくふくらむ。文様帶は口縁部は横位2段、体部も上半部を主体に横位の文様帶を有するが、隆線・沈線による懸垂文を4単位置く。口縁部上段の施文には交互刺突文・無文が見られる。30は粘土紐の貼付文をもつ。口縁下段には縦位平行沈線か格子目のモチーフを描く。体部はやはり交互刺突文・格子目モチーフを多用し、また格子目モチーフ等を逆U字形の沈線で連続区画するものもみられる(30・142)。懸垂文は隆線の他に交互刺突と平行沈線を重ねるものもある。その他端部・隆線上に爪形文を加える点も本形態の特徴である。なお131・136には体部に縦位の木目状燃糸文がみられる。

B (26・34・95・153) Aの口縁部上段文様帶を欠除し、形態もキャリバー形をなす。施文は格子目・綱線文・逆U字状モチーフを平行沈線で行う。端部には爪形文も見られる。体部は破片ではAと区別ができない。

C (28) 1点のみ存在する。口縁部文様帶を無文とし、短くなるものを挙げる。28は直線的に開く器形で、口縁はわずかな幅しかもない。体部上半に平行沈線の斜線文を横帶させ、Y字形の隆線懸垂文により4分割する。さらに下半は2条の平行沈線による懸垂文も有する。本土器は地文に繩文を施し、口縁部横位、体部は縦位に転がす。第2類との関連が考えられる。

D (163) 1点のみだが、A～Cに当てはまらない施文をもつ。163はキャリバー形の口縁部に直線的な体部を有するもので、大きな波状口縁をなす。口縁端部下・頸部下には細い半截竹管状工具による爪形文を5条横走させ、本類の特徴を備える。しかし、体部は綾杉状の沈線構図をもつ長横円形の区画文を縦位に全面配し、異質な雰囲気を受ける。器形・口縁部の施文から中期初頭に含めたが、他に類例を知らない。他地域、特に北陸地方と関連するものなのだろうか。

第2類 繩文を多用する土器

第1類に比べ、やや少ないようである。

A (31・32・97・113・128) 口縁に沿って繩文帯をおく土器である。器形はキャリバー形の口縁にまっすぐかやや上半がふくらむ形態をなす。地文の繩文は口縁部では横位、体部は縦位に単節繩文(結節をもつものが多い)を施すのが一般的だが、31・32は無節である。また113は木目状燃糸文であり、北陸地方からの影響が考えられる。施文は本遺跡では簡素なものが多い。口縁部は繩文帯下端

に沿って平行沈線や下向きに刺突を施した単沈線を配し、以下無文となる。128は波状口縁下に山形の貼付文を行う。体部の施文は128に平行沈線の横線文・渦巻文・懸垂文がみられ、また113は無文となっている。

B (33-39-40) 口縁部・体部に沈線による弧線を横帯させるもので、Aと同様な形態となる。弧線により区画された内部には三叉文や円文等の沈線文によりいわゆる玉抱き三叉文を構成する（33）。体部はY字形の隆線懸垂文で4分割され、上半部に弧線文を配置する（39・40）。

C (35-126) 口縁部に長く伸びたくさび形の印刻文を連続させるもので、角押文を伴っている。体部の破片は出土していないが、無文か角押文、鍵形に配する隆線等が施文されると思われる。地文は施されない。

D (25-27) 無文の深鉢で一応本類に含める。25は筒状の形態になると思われ、27は口縁部が短くくびれ、ふ厚い。どちらもナデで仕上げを行っている。

第3類 浅鉢 (24-36-37-41-121-154-156-160)

第1・2類に伴う浅鉢で、朝顔形に大きく開く形態をなす。口縁部内面が肥厚し、文様帶を形成する。4単位の大きな波状をなすものもみられる（36・37）。施文は幅広の爪形文を2~3条巡らし、刻目や繩文を伴う場合も多い。他に爪形文の幅の狭いものや結節沈線（角押文）、刺突列点文も見られる。外面への施文はなく、内外無文部は入念な調整を行っている。

第1類～第3類の位置付けだが、第1類A～Cと第2類Aは2住での有り方からみておおむね併行するものと考えられる。第1類は原村大石遺跡や八王子市西野遺跡（注1）に良好なものが見られ、本遺跡のものは例えば30の爪形文の欠除、口縁上段の無文化、逆U字形の区画文の発達等ややそれより下ると思われる。第2類Bは松本市内では雨堀遺跡の土器一括廃棄遺構（注2）で主体的に存在し、そこでは1類A～C・2類Aは見られない。大石遺跡では土塙より出土しており、第1類と分離して扱っている（注3）。第2類Cは雨堀遺跡B1住（注4）より一括して出土している。角押文等次段階につながる要素をもっており、初頭の最終末に位置付けられよう。

近年中期初頭の土器編年を見直しが図られてきているが（注5）、各系統の変遷段階や併行関係等未解明の部分が多く緒についたばかりといえる。松本平ではここ最近当該期の資料が増えつつあり、特に初頭後半期については編年作業の必要が迫られてきている。ここではそれをする余裕がないが、先に触れた1類A～C・2類Aの段階として本遺跡2住およびやや下って林山腰遺跡土塙21（注6）、次段階2類Bの遺跡として雨堀遺跡土器一括廃棄遺構、さらに初頭最終末として雨堀B1住の大まかな変遷が成り立つと考えられる（注7）。

注1 「西野町中央遺跡報告 草村その1」 1976 及び「北八王子西野遺跡」 1974

2 松本市教育委員会 「松本市内田雨堀遺跡第2次緊急発掘調査報告書」 1982

3 井戸尻保年に語りついている。

4 松本市教育委員会 「松本市内田雨堀遺跡（第1次）」 1981

5 三上謙也 「绳文時代中期初頭土器の分類と検討」『製久保遺跡』 岡谷市教育委員会 1980

6 本遺跡と後にて松本市教育委員会が調査を行い、本著と同時に報告予定である。

7 雨堀遺跡の土器の位置付けについては島田哲男氏が注2文献において行っている。

②縄文中期前葉の土器

松本平中期IV期（新道式併行、以後〇期と略す）（注1）に比定される一群である。3グリッド、3住、土塙4より器形の判明するものが出土している。器種は深鉢・有孔鉢付土器がある。

A深鉢（3・4・11・13・14・42～49・52・69） 3・13はやや細身でゆるく開く器形となる。隆線による横方向の区画文を特徴とし、楕円形ないし長方形の区画文を頸部・下半部に構成する。またそれを区切るように縦位構成の隆線施文が見られる。区内には沈線により波状文・直線文が横位に引かれ（3）、また楕円区画内には縦位に充填施文される。13には頸部にY字状の施文、3には角押文が見られ、古い要素を残す。42～45・47・69・81は先端が角形ないし三角形の工具による押引文が多用される。これらは隆線とともに楕円形等区画文を構成する。45を除き内湾口縁で、端部は外方に折れる。また69には突起が見られる。以上が本類の主体となるもので、これに外来要素をもつ土器が加わる。11は平出3類A系の土器で、体部がゆるくふくらみ細身である。施文は半截竹管状工具による平行沈線を縦位に充填し、くびれ部には3条を横位に施文する。胎土は在地のものとやや異なるが、器厚も含め3類Aともやや異なるようである。52は雨堀遺跡等の当該期土器類にしばしばみられるもので、半截竹管状工具による半隆起線文による区画文を構成する。北陸地方の影響を受けたものと考えられる（注2）。4は口縁部がくの字に折れ、見慣れない施文を施す。口縁部は隆線の横位区画内に太い半截竹管状工具により交互刺突を行う。体部は縦位構成で、3条の隆線による懸垂文に2条程の隆線により曲線構図が描かれる。地文はR L縄文を縦位に行う。本土器の類例は県内では飯山市深沢遺跡が挙げられる（注3）。施文技法等はやや異なるが、器形・口縁部の横位構成・体部の縦位構成と曲線構図は似ており、北陸の新崎式の影響を受けたものと推察される。

B有孔鉢付土器（19） 19は3住覆土中より出土している。器形は体部中央が丸く張り、樽形を呈する。器厚は大きさに比して薄く、入念にミガキが行われる。施文は簡素で体中部～上部に高い隆線による横位の長方形区画文が描かれる。区内にはやはり隆線の曲線が配されている。なお器壁内外には塗彩の痕跡が見え、内面は赤色、外面は黒色に塗られているようである。

注1 猪田哲男「縄文時代中期における松本平」『松本市内田川遺跡第2次発掘調査報告書』松本市教育委員会 1982

2 注1文献に同じ

3 猪田哲男氏の教示による。

西沢隆治「深沢遺跡」『長野県史 考古資料編 全一巻（二）主要遺跡（北・東部）』長野県史刊行会 1982

③縄文中期中葉の土器（6・18・22・23・50・51・98・99・114～119・133・162）

大半がV～VI期（藤内式併行）に比定されるが、一部VII～VIII期（井戸尻式併行）も含む。器種は深鉢が見られるが全形の分かるものはない。98は直立する口縁部破片で、波状・直線の隆線上に爪形文が加えられる。51・108・114はいわゆるキャタピラ文が施される。それぞれ隆線の区画に沿って施される。51・108は区画内に波状沈線や三叉文が施され、114は横円区画を構成、下部に縱位の沈線も充填される。115～117・119・138は綾杉状等刻目を施した隆線の区画文で、内部に細い半截竹管状工具による縱線・斜線が施される。116はいわゆる櫛形文である。119には三叉文が見られ、138は縱位の長方形区画の一部である。162は屈折底上部の横位横円区画文であろう。内部は波状の沈線が施される。18・23は把手で、18は中空で内側がミミズク状になる。外面は沈線・先端三角形の押引文・刻目により複雑な構図が描かれる。20は特徴的な沈線・隆線による曲線構図で、焼町タイプと呼ばれるものである。

6は縱位2条の刻目隆線と隆線沿いおよび直交して結節沈線を施す。VIII期のものである。22は深体側面の把手で、VII期に属すと思われる。

④縄文中期後葉～末葉の土器

X I期～XII期（曾利III～V式）の土器で、初頭の土器に次いで出土量が多い。X I・X II期とX III期に分けて述べるが小片が多く連続するものもあり、明確に分離できない。

〔XI～XII期〕 X II期のものが多いと考えられ、綾杉状沈線等に退化が見られる。

唐草文系（1・53・55・58・75・76・78・82・83・85・91・103～105・132・134・138・145・146・148） 器面を隆線の大柄な渦巻文で飾り、地に太い沈線で主に綾杉状の構図を描くもので、器形は橢形に口縁部を内湾させるものが多い。文様帶は口縁より無文帶、交互刺突文・縱位沈線・組紐文等による横位区画文帶、唐草文・綾杉状沈線等体部文様帶に分かれ。口縁部には沈線文・交互刺突文を施す把手が付されるものもある。

縄文系（9・56・57・87・90・143） 縄文を多用する一群で、キャリバー形に口縁部が内湾し、頸部がくびれる器形を呈する。口縁部は隆線ないし太幅の沈線で横位の横円区画文を作り、内部に縄文を横位に施す。沈線・隆線は区画の一端で渦巻文となる。体部は縱位沈線間に波状の沈線を垂下させ、縄文を縱位に転がす。

〔XIII期〕両系とも施文の退化が著しい。

唐草文系（10・12・54・59・64・65・68・72・84・88・89・94・109・110・139～141・147・149・150） 体上部の横位区画文が見られなくなり、沈線か隆線で縱位の区画を4ないし8単位に行う。区画内にはハの字形の沈線や縱位の短い沈線を充填している。10のような口縁部が内湾する器形も見られる。

縄文系（73・80・86・102・111・135・137） 口縁部の文様帶が退化し、見られなくなっている。縱位構成の沈線間に縄文を施している。

⑤縄文後期の土器 (21・120)

21は注口土器の把手である。突起の形状からして初頭のものであろうか。120は外反して開く深鉢口縁部破片で、口縁下に刻目を施した隆線を横走させる。以下には横位の沈線・縄文による構図が描かれる。菱形ないしは三角形になろうかと思われる。時期は壠之内II式であろう。

⑥縄文晩期末～弥生時代の土器 (79)

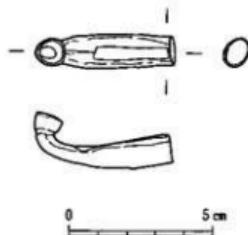
1点存在する。深鉢ないし壺形の土器底部で、底面に網代痕を残す。側面には縦位に貝殻条痕に似せた太い条痕を施している。胎土は在地のものと見られる。体部・底面とも器壁は薄い。

(2)土製品 (第13図 106・112)

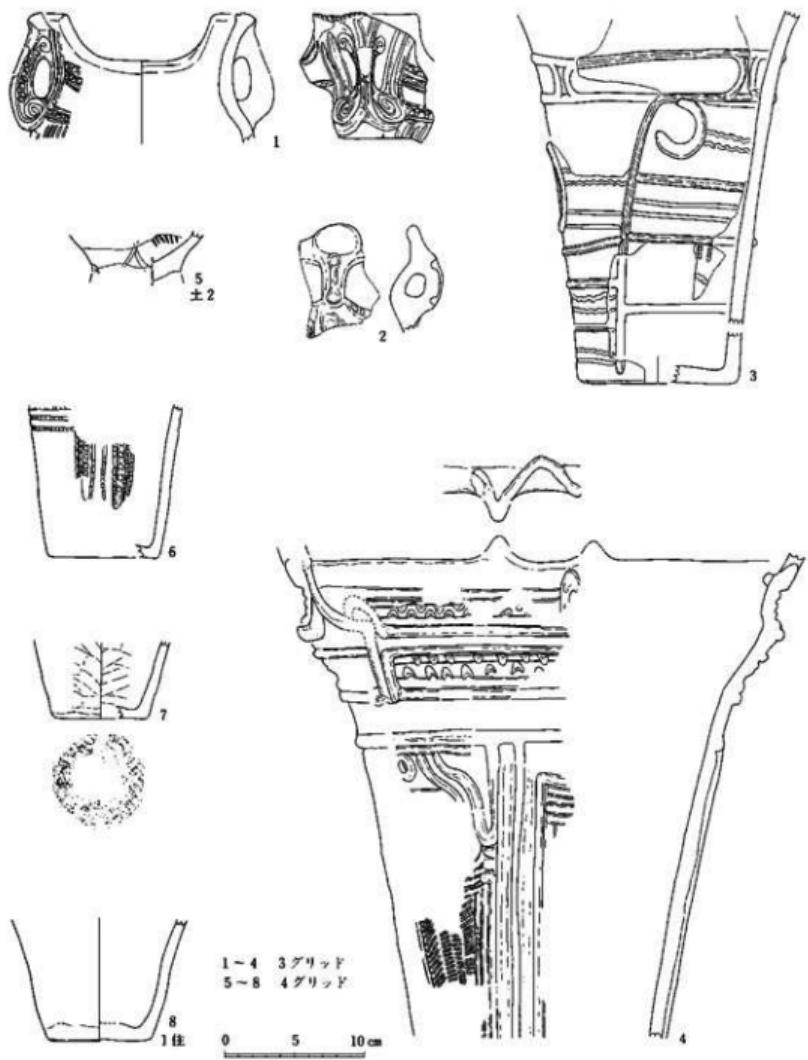
土偶・ミニチュア土器がある。106は土偶頭部で半球形を呈する。平坦な面が前面で、顎面は貼付されていたと考えられ、剥離している。顎には頭部中途まで細い穴があけられている。中期に属するものと考えられる。112はミニチュア土器で、輪積成形している。外開する深鉢形を呈し、Y字状に削り出した隆線が見られる。施文よりみて中期初頭かIII期のものと思われる。

(3)銅製品 (第5図)

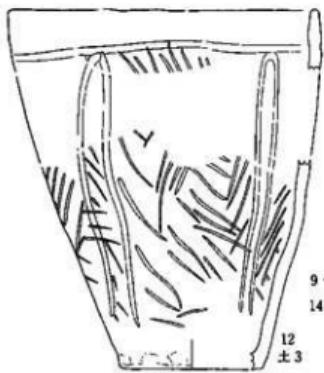
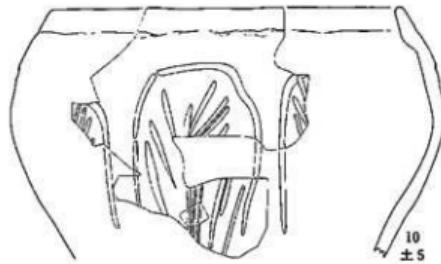
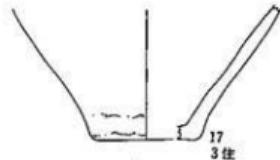
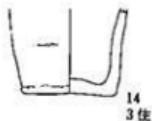
11グリッドよりキセルが出土している。全長4.7cmで保存状況は良好、完形である。火皿は小振りで開きが小さく、径9mmを測る。脂返しは太く、下方に垂れ下がらない。肩も脂返しからまっすぐ移行し、段はもっていない。肩部の直徑は1cmで歪んでいる。なお首上部は叩かれた結果接着部が割れ、細長い銅板をろう付け、補修している。その後再び叩かれたためか、脂返しに近い位置が大きく凹んでいる。時期的には火皿、脂返し、肩の形態より新しいと思われる。



第4図 11グリッド出土遺物

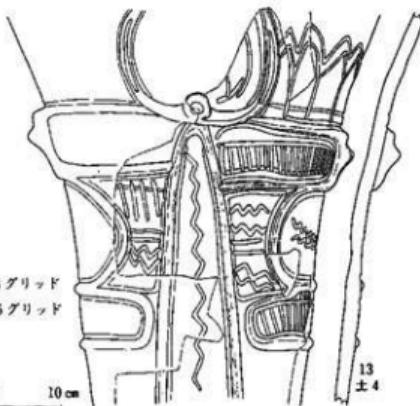


第5図 土器実測図(1)

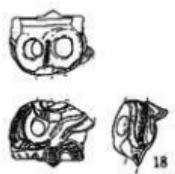


9-13 5グリッド
14-17 6グリッド

0 5 10 cm



第6図 土器実測図(2)

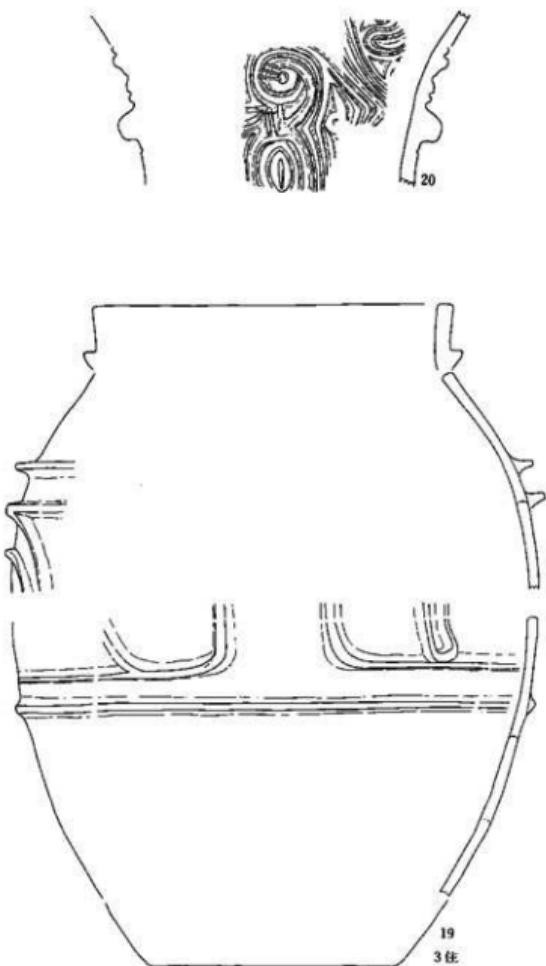


18・19 6グリッド

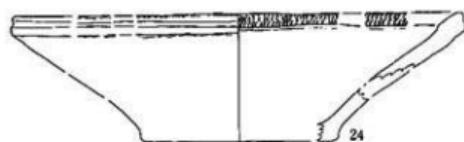
20・21 8グリッド

22・23 9グリッド

0 5 10 cm



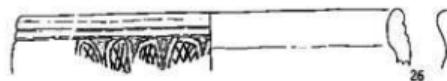
第7図 土器実測図(3)



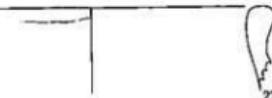
24



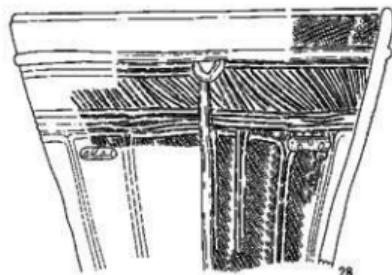
25



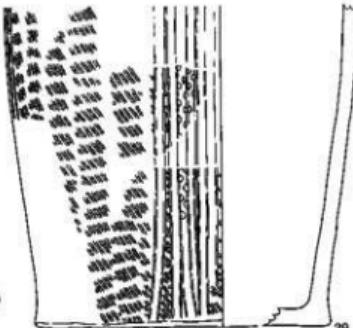
26



27



28



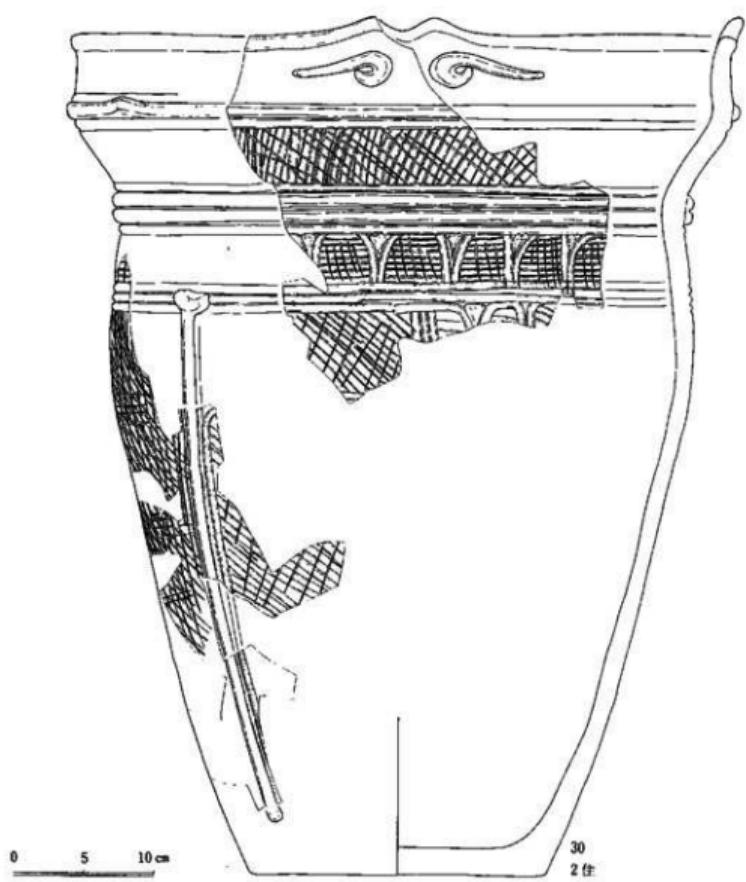
29

0 5 10 cm

24-29 9グリッド(2倍)



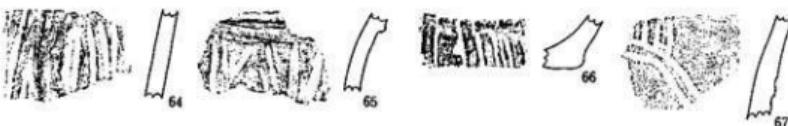
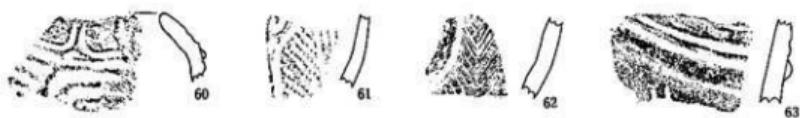
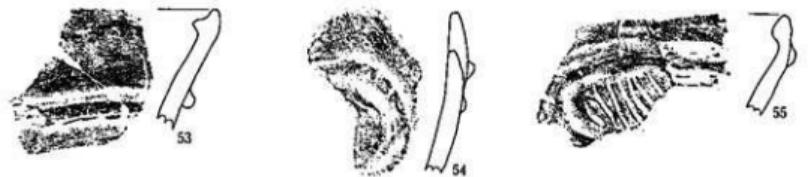
第8図 土器実測図(4)



第9図 土器実測図(5)



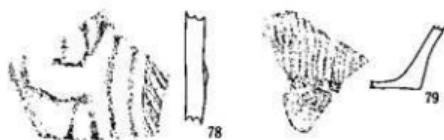
第10図 土器拓影(1)



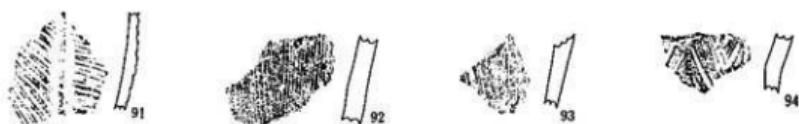
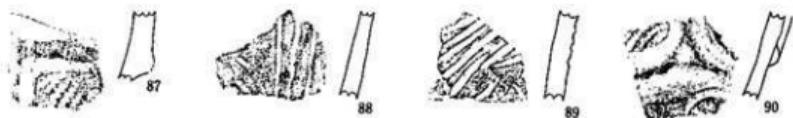
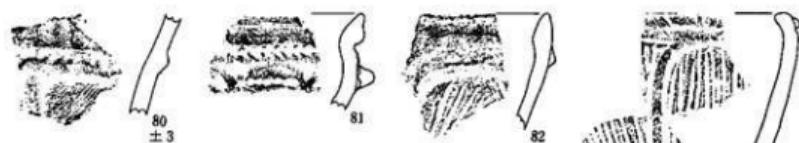
4グリッド



第11図 土器拓影(2)

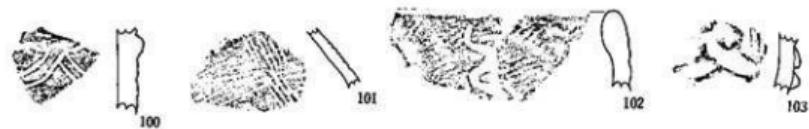


5 グリッド

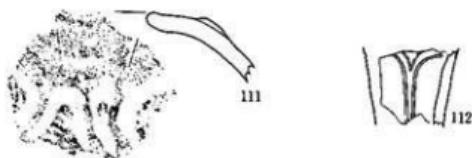


第12図 土器拓影(3)

8 グリッド

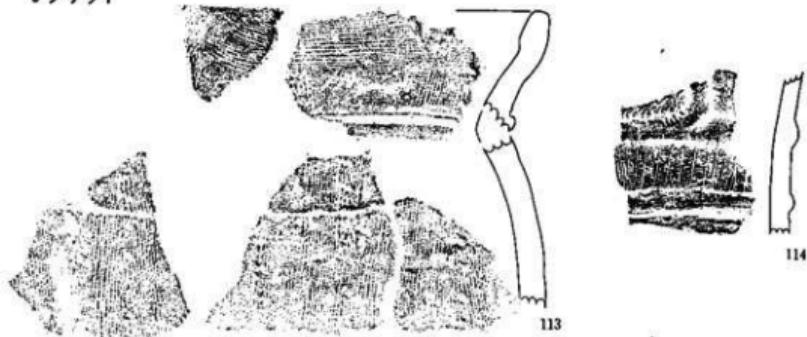


7 グリッド



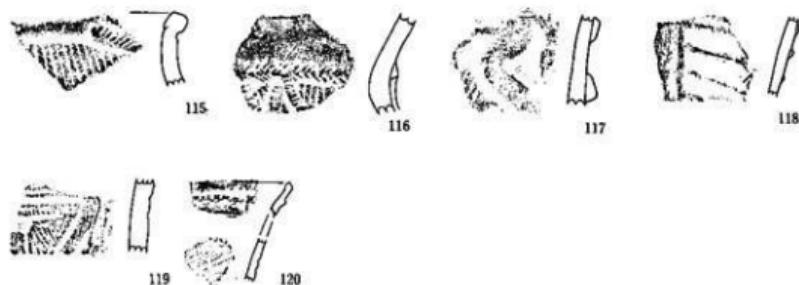
第13図 土器拓影(4)

8 グリッド



113

114



115

116

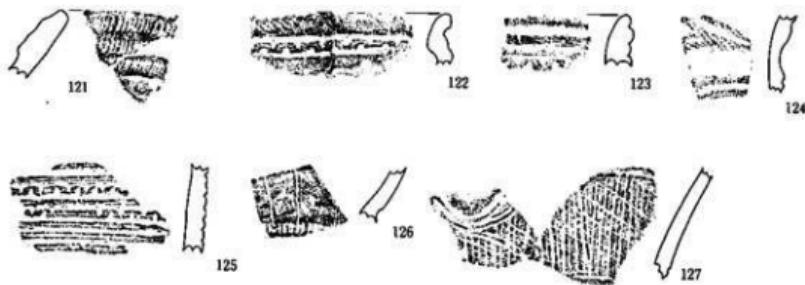
117

118

119

120

9 グリッド



121

122

123

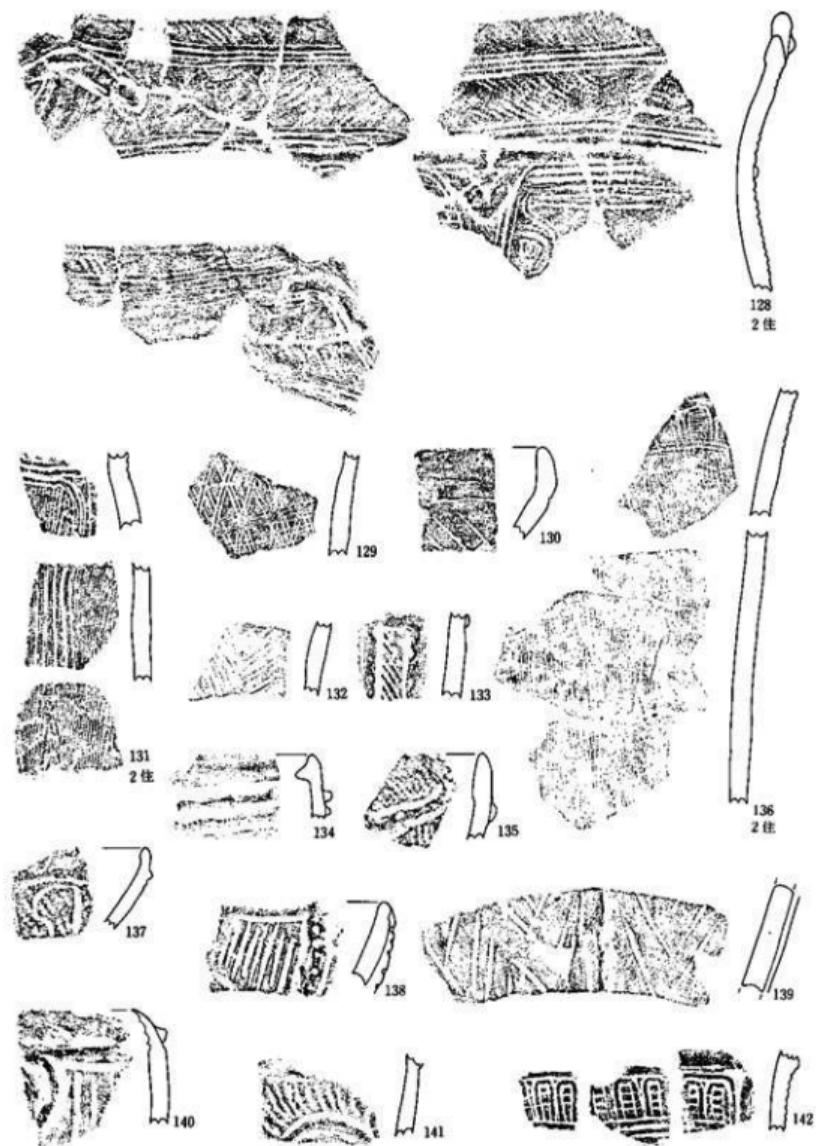
124

125

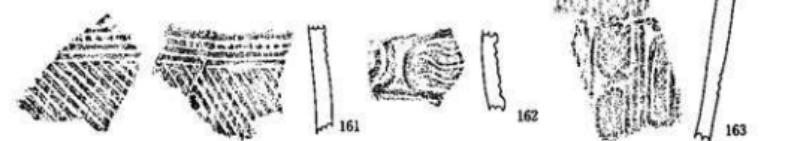
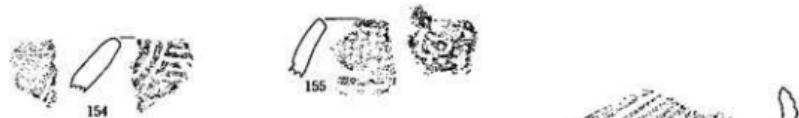
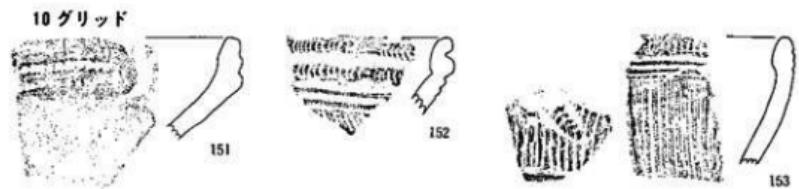
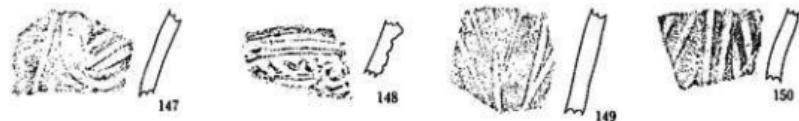
126

127

第14図 土器拓影(5)



第15図 土器拓影(6)



第16図 土器拓影(1)

(4) 石 器

今回の発掘調査では2~10グリッドから定形的な石器・2次加工のある剝片・使用痕のある剝片・剝片・碎片が出土した。このうち、定形的な石器・石製品23点を図化した。なお、石質の鑑定については太田守夫氏のご教示を受けた。

- 1) 石 錐 3点出土。すべて黒曜石製の凹基無基錐である。1は側辺が鋸歯状に整形されている。3は横長剝片を素材にしたもので腹面に凸形のバルブを残している。また、背面の片側辺と脚部の一部に整形剝離がみられないので未製品と考えられる。
- 2) 石 锥 4点出土。すべて黒曜石製で、4~6は棒状錐、7はつまみをもつ錐である。4は錐部が両面加工である。5は素材の縦長剝片の形状が原因で湾曲しているが、両面加工の錐部の先端は摩耗している。6は角柱状の錐部をもつが、整形剝離があらいで未製品の可能性がある。7は素材の縦長剝片の縁辺を整形して錐部をつくりだしたもので、背面は両側・腹面は片側を剝離している。背面の中央には稜がのびているため錐部の断面は三角形を呈している。
- 3) ピエス・エスキュー 3点出土。すべて黒曜石製である。8は平面が長方形、断面が紡錘形で、下側の縁辺にはつぶれが生じている。截断面がある。9は平面が逆三角形、断面が紡錘形で、截断面がある。10は平面が長方形、断面がD字形で、上側の縁辺にはつぶれが生じている。
- 4) スクレイパー 4点出土。おおむね平面形は横長の長方形で刃部は直刃である。11は刃部は両面加工で、上側辺は階段状剝離で厚めに整形している。12は下側辺のおおよそ1/2にわたって両面加工の刃部がつくりだされている。刃部はわずかに内湾し、上側辺は外湾するため平面形は鎌形を呈している。13は両面加工の刃部をもつもので、表面は風化がはげしい。14は側辺から刃部にかけて両面加工をおこなっている。とくに、刃部は階段状剝離で厚さを減じたのち、さらに細かい剝離で整形をおこなっている。12がホルンフェルス(砂岩)製、その他は砂岩製である。
- 5) 打製石斧 8点出土。15は背面に礫の表皮を残し、腹面は素材である横長剝片の凸形のバルブとバルバースカーが観察できる。打点が刃部よりにあったため、断面は下半部のほうが厚くなっている。側縁部には着柄痕と考えられるつぶれが生じている。16は打製石斧の頭部の残片である。17は背面に礫の表皮を残している。素材は縦長剝片で、打点側を刃部にしているため、頭部のほうが薄くなっている。側縁部につぶれ、刃縁部に摩耗痕がある。18は撥形を呈すが、刃部は破損によって失われている。側縁部につぶれ、破損面に摩耗痕が生じている。後者の摩耗痕は破損面に接する剝離面にも観察される。このことから、石斧の使用の際に刃部が破損したのちも、着柄したまま使用を続けた可能性が考えられる。19は偏刃状を呈するが、刃部をつくりだすための剝離が顕著でなく未製品の可能性がある。20は薄身で刃部が失われている。21は背面に礫の表皮を残しているが、素材は不明である。側縁部につぶれ、刃縁部に摩耗痕が生じている。22は撥形の石斧の頭部である。
- 6) 石 棒 1点出土。石棒の端部で、断面は棒円形を呈している。先端部に敲打痕、表面に不定方向の研磨痕が観察される。砂岩製。

石器一覧表

石錠

No.	図 No.	分類	注記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
1	1	四基・無茎	9G・2往上層	(2.24)	(1.55)	(0.33)	(0.76)	黒曜石	片側欠	
2	2	四基・無茎	9G・北東部	2.21	1.59	0.29	0.79	黒曜石	完形	
3	3	四基・無茎	10G・東部	(2.19)	(1.46)	(0.43)	(1.15)	黒曜石	片側欠	

石錐

No.	図 No.	分類	注記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
1	4	棒状?	5G	(2.08)	(0.81)	(0.46)	(0.83)	黒曜石	頭部欠	
2	5	棒状	9G・2往上層	2.31	0.88	0.46	0.72	黒曜石	完形	先端摩耗
3	6	棒状	9G・2往上層	2.59	0.86	0.77	1.33	黒曜石	完形	
4	7	つまみ	9G・2往上層	2.53	1.35	0.46	1.32	黒曜石	完形	

ピエス・エスキーキー

No.	図 No.	注記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
1	8	4G・1往覆土	1.95	1.34	0.63	1.58	黒曜石	完形	
2	9	5G	1.66	1.31	0.38	1.03	黒曜石	完形	
3	10	8G・墨石状遺構	2.31	3.42	0.81	6.35	黒曜石	完形	上端部つぶれ

スクレイパー

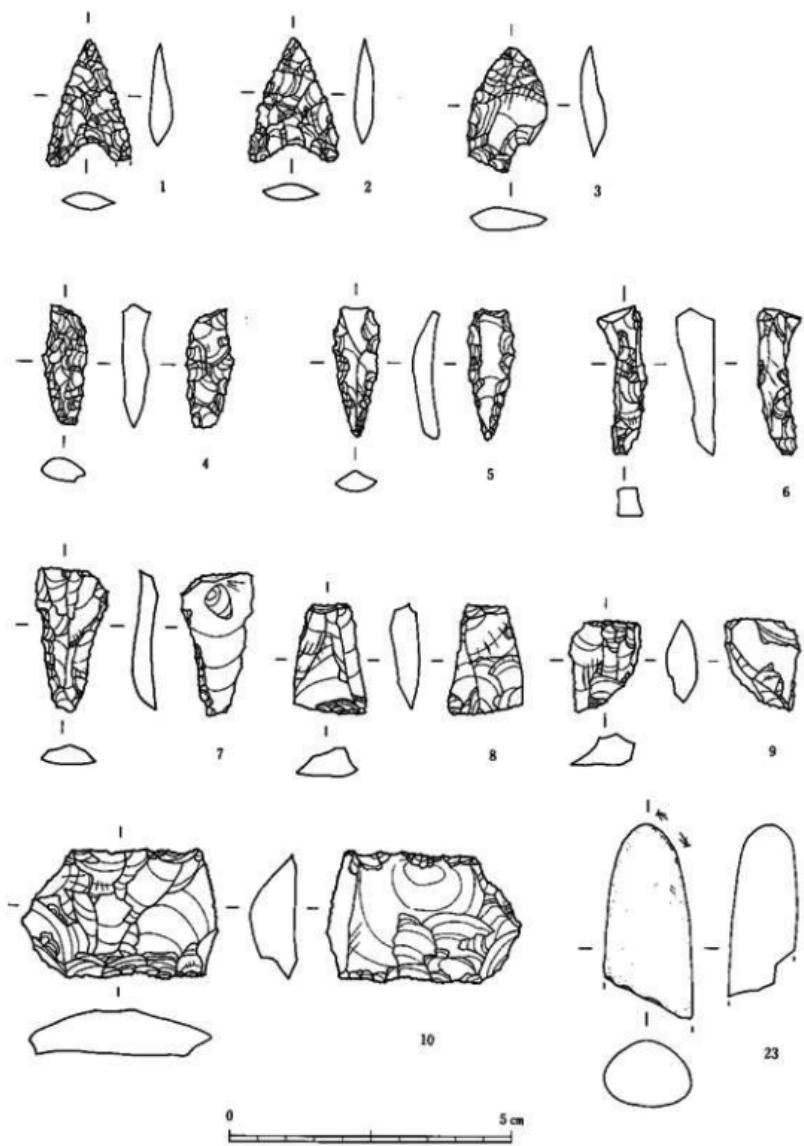
No.	図 No.	注記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
1	11	3G・黑色土	(5.04)	(4.91)	(1.11)	(29.35)	砂岩	1/2欠	
2	12	6G・3往	(3.58)	(9.01)	1.14	(36.91)	カルシフュルス (砂岩)	片端欠	
3	13	8G・墨石状遺構	3.95	8.71	0.86	37.58	砂岩	完形	
4	14	9G・黑色土	(5.20)	(6.16)	(1.04)	(52.89)	砂岩	1/2欠	

打製石斧

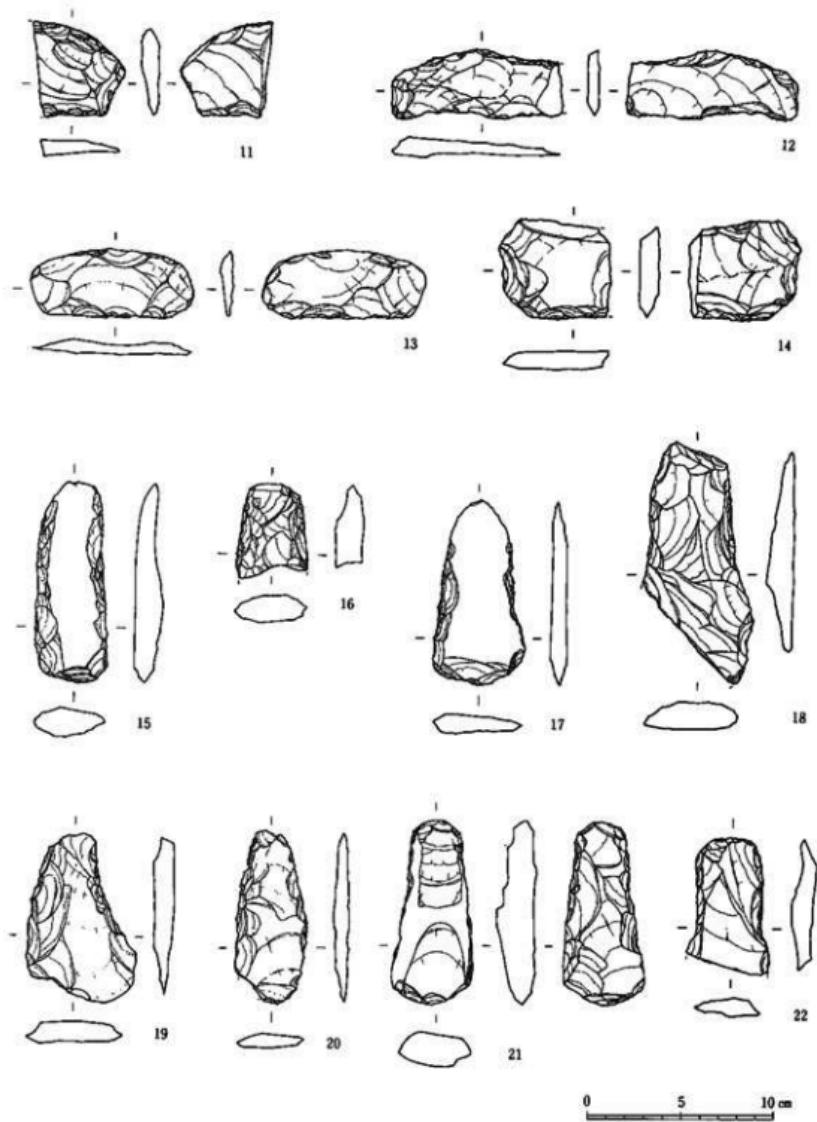
No.	図 No.	分類	注記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
1	15	短角・円刃	3G・黑色土	10.55	3.91	1.54	91.13	ホルンフェルズ (砂岩)	完形	側縁部つぶれ
2	16	不明・不明	3G・黑色土	(4.95)	(3.83)	(1.63)	(36.25)	ホルンフェルズ (砂岩)	頭~刀部欠	
3	17	鋸・円刃	4G・1往	9.85	4.88	1.09	63.12	ホルンフェルズ (砂岩)	完形	側縁部つぶれ・刀部摩耗
4	18	鋸・不明	4G	(19.98)	(6.01)	1.52	(106.11)	ホルンフェルズ (砂岩)	刀部欠	刀部欠損部を再使用
5	19	鋸・圓刃	8G・墨石状遺構	9.00	5.68	1.42	71.89	砂岩	完形	
6	20	鋸・不明	8G・墨石状遺構	(9.24)	3.77	0.88	(36.13)	ホルンフェルズ (砂岩)	刀部欠	
7	21	鋸・円刃	9G・黑色土	9.69	4.14	1.91	93.70	ホルンフェルズ (砂岩)	完形	側縁部つぶれ・刀部摩耗
8	22	鋸・不明	9G・黑色土	(7.09)	(4.41)	(1.48)	(51.35)	砂岩	下半部欠	側縁部つぶれ

石棒

No.	図 No.	注記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
1	23	5G	(6.75)	(3.16)	(2.19)	(57.28)	砂岩	不明	



第17図 石器実測図(1)



第18図 石器実測図(2)

III 調査のまとめ

遺跡の範囲について 今回の調査は場整備対象地域の地下遺構確認が目的のため、グリッド調査という方法をとった。遺跡地北半部はビニルハウスが立っており、または場整備も及ばないこともあります。調査は出来なかった。従って遺跡南半部の遺構の広がりを確認するにとどまった。その結果は前章に詳述しているのでここでは触れないが、遺跡の広がりについてまとめておきたい。

台地上面の木下遺跡は、遺構の掘こまれる地山が砂利質ロームであったり、また黒色土であったりして不安定なものであるが、各グリッドより多量の遺物が出土している。遺構は7グリッド中5グリッドに検出され、全面に高い密度で分布することが判明した。北半部も古屋人兄氏所蔵の完形土器類が出土しており、全面に遺構が広がるものと考察される。しかも北半部は最も高い面になってしまい、より高密度に遺構が分布しているのではないだろうか。

遺跡の時代と遺構の分布について 今回出土した遺物、特に土器の年代は中期初頭～前葉、中期末にその頂点があることがわかった。また検出遺構もすべてその頂点となる時期のものばかりである。また前述の古屋氏所蔵遺物は中期中葉のものが多く、北半にはこの時期の遺構が広がっているらしい。以上の事からして、本遺跡の年代は縄文中期初頭～中葉・末を中心としたものと言えよう。また少数ながら後・晩期の遺物を得たことは、近隣に石行遺跡や横山城遺跡等該期の遺跡が存在することからも重要な点と言える。

さて時代毎の遺構の広がりだが、中期初頭の遺構・遺物は東側に多く、この地域に中心があつたものと考えられる。そして台地西麓には土器廐棄遺構があり、この地が廐棄の場として使用されたのだろう。中期前葉になると台地前面に遺構が見られ、逆に東側では遺物が少ない。西側に居住地が移動したのだろうか。中葉は古屋氏所蔵品も示すように、北半部に中心が置かれるようである。続く中葉末～後葉は遺物が少なく、空白期になるようである。後葉も後半になると徐々に遺物が多くなり、末葉に至って再び生活の場となり、遺構が台地前面を中心に広がっている。しかし後期に入ると遺構は見られなくなり、主たる生活の場ではなくなるものと推察されよう。

前田遺跡との関係について 昭和58年調査の前田遺跡では、縄文時代の遺構は後葉を中心としたものであった。この時期は木下遺跡面では欠落期であることを述べたが、両遺跡は一体のものと考えられるため、中期後葉に生活の場が台地下面に移動したものと推察されよう。しかしこの面での生活は長くは続かず、再び台地上に戻っていったものと思われる。

以上、少ない結果から多くを言いすぎた点もあるが、2回の調査で前田木下遺跡が縄文中期のほぼ全般にわたる大集落であることが確認できた。

最後に吹き付ける時雨と風の中調査に参加された作業員の方々、調査に深い理解と惜しみない協力をいただいた寿土地改良区をはじめとする地元の皆様方に、深甚なる感謝の意を表して終わりとします。



6・8グリッド
(東より)



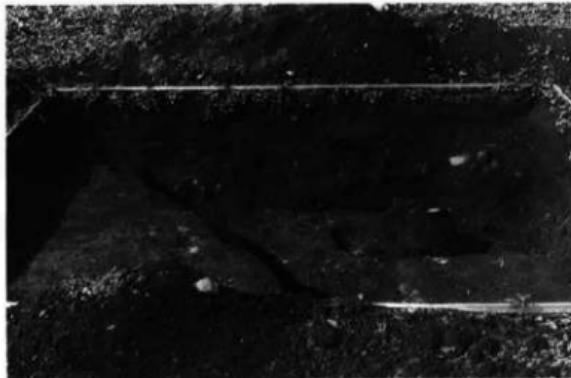
1～3グリッド
(北より)



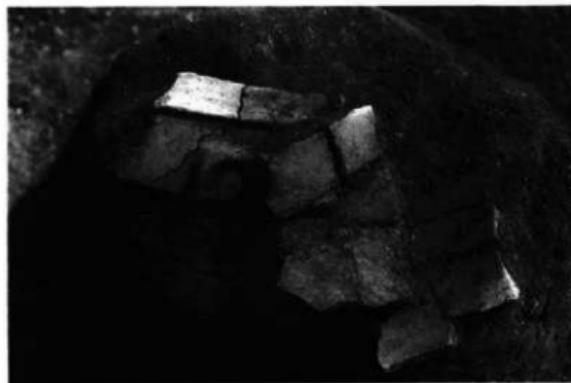
4グリッド
第1号住居址、土塁1・2
(東より)



5 グリッド
土塙1・3～8
(南より)



6 グリッド
第3号住居址・土塙17
(東より)



第3号住居址
土器出土状況



13

28

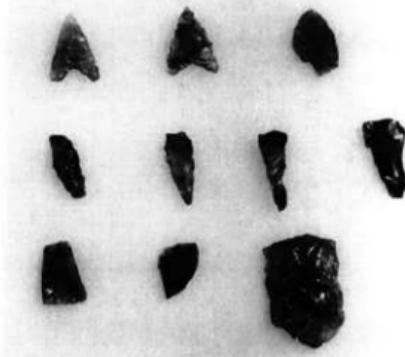


4

12



30

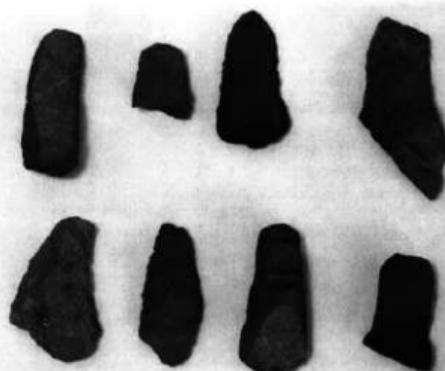


1 ~ 10



11~14

23



15~22



作業風景

松本市文化財調査報告No.62

松本市前田木下遺跡
— 遺構確認調査報告書 —

昭和63年3月20日 印刷

昭和63年3月30日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 川越印刷株式会社

